書評

南川高志著『海のかなたのローマ帝国――古代ローマとブリテン島――』

桑山由文　堀内隆行　疋田隆康

一

ローマン・ブリテン、すなわち、ローマ時代のブリテン島については、当然のことながらイギリス本国において多大な研究蓄積がある。本書はこのテーマに正面きって挑戦した、わが国初の本格的研究書である。著者の南川高志・京都大学教授は、西洋古代史に関する多数の専門論文を著すだけでなく、元首政期ローマ帝国を扱った啓蒙書でも好評を博し、最近には、五賢帝期ローマ帝国に関するほぼ唯一の本格的ラテン語史料『ローマ皇帝群像』の翻訳も行うなど、多方面で活躍している。

本書の構成は以下の通りである。

序　章　なぜローマン・ブリテンか
第一章　ローマ帝国と大英帝国
第二章　海峡を越えたローマ人――ローマ人の見た古代ブリテン
第三章　征服と支配――女王ボウディッカの反乱と歴史家タキトゥス
第四章　属州ブリタンニアと「ローマ化」――ブリテン島はローマ帝国であったか
第五章　北辺のローマ帝国――辺境要塞兵士の残した木板文書を読む
終　章　海のかなたのローマ帝国

本書は、単にローマ属州研究史上に位置づけられるだけではなく、鉄器時代ブリテン島や近現代イギリス史をも射程に置いた、大変幅広い視野を有している。そのため、一分野の研究者単独では本書の意義を充分に明らかにすることは困難であるので、イギリス帝国史、ケルト文化、古代ローマ史をそれぞれ専門とする堀内、疋田、桑山の三人が共同で評した。内容紹介については、序章と第一章を堀内が、第二章、第三章を疋田が、第四章、第五章、終章を桑山が担当し、書評については、桑山、疋田、堀内の順で、担当の章に限定せず、それぞれの専門的視点から本書全体を評した。

（桑山由文）

二

序章はまず、イギリスに残る古代ローマ人の足跡より説き起こし、ローマン・ブリテンの通史を振り返る。更に、イギリスにおけるローマ帝国観、ローマン・ブリテン観、辺境からのローマ帝

国の再考、「ケルト」観の大変化、の各点について先行研究を俯瞰する。

次いで第一章は、「イギリス史の中でローマ帝国やローマン・ブリテンがいかに解釈されてきたか」を辿り、問題の所在をより明確にする。ブリテン島の歴史的研究は、W・キャムデン『ブリタンニア』（一五八六年）にはじまった。一八世紀には、イギリス国内のローマ遺産が注目を集めることとなり、一九世紀には、考古学的研究活動が本格化する。他方、イギリスにおけるローマ帝国観の問題に目を転じると、独裁政治と退廃、衰退等、従来の消極的評価に対して、一八七七年のインド帝国成立以降は、J・R・シーリー『イングランドの拡大』（一八八三年）のように、帝国同士の親近感が高まった。こうした時代背景を反映して、イングランド人のアイデンティティも従来の「テュートン神話」、あるいはローマ人の支配に抵抗した古代ブリトン人への称賛を脱し、一八八〇年代には、ローマ人の文化的子孫とする議論が浮上する。

かかる転換期に在って、ローマン・ブリテン研究を学問的に確立したのが、オックスフォード大学のF・J・ハヴァフィールド（一八六〇―一九一九年）である。その著書『ローマン・ブリテンのローマ化』（一九一二年）は、モムゼンの「ローマ化」概念を継承し、またローマン・ブリテン考古学を初めて本格的に導入した。他方、次の世代に属するR・G・コリングウッド（一八八九―一九四三年）は、「ローマ化」概念と距離をおき、ローマとケルトの要素の融合としてローマン・ブリテンを理解している。第二次世界大戦後、研究は碑文、木板文書、地理的資料、航空写真等の領域で急激に発展した。しかし、ハヴァフィールド以来の研究は近年、「ラディカルな考古学者たち」の批判対象となっている。例えば、R・ヒングリの一連の著作は、キプリングの作品等も参照しつつ、ローマン・ブリテン研究とイギリスの植民地支配との関係を暴き出し、前者が後者に資したことを強く批判した。このヒングリ等の立場について、南川氏は興味深いが行き過ぎとし、また「ローマ化」等の概念・モデルの再検討の必要を感じつつも、「歴史家の目からする総合的な考察」がより重要である、と説く。

（堀内隆行）

第二章からは、具体的なローマン・ブリテンの記述にはいる。先ず、検討されるのが「ローマ人は誰を征服したのか」という問題である。従来は、鉄器時代に大陸からケルト人がブリテン島に移住し、ローマ人が征服したのは「ケルト系」ブリトン人とされ、古典史料に基づき、ベルガエ人の移住という学説が形成された。二〇世紀半ば以降、「ベルガエ人の移住」が否定されるようになると、続いて「ケルト」の存在を疑う見解が提出され、論争を引き起こした。近代以降、「ケルト」という言葉が最初に現れるのはジョージ・ブキャナンの『スコットランド史』（一五八二年）であり、更に「ケルト」を本格的に学問の世界に持ち込んだのはエドワード・スィドの『ブリテン考古学』（一七〇七年）であるとされる。南川氏は、「ケルト」を巡る議論にはこれ以上深入りせず、「民族のカテゴリやエスニシティに拘泥するよりも、ブリテン島住民が有した文化や生活の実態」解明を重視し、他者認識の歴史学を提唱する。エスニシティやカテゴリではなく、他者へ

の眼差しや自己認識を重視し、この点について、ローマ人のガリアに関する記述を援用することにより、ローマ人のブリテン島観に迫ろうとする。ローマ人は、ガリア社会をドルイドに指導された「野蛮な」社会と見ていた。従って、ガリアから更に海を隔てた「秘境」ブリテン島については、自己中心的な世界観のもとでさらに強烈な異人像を形成していたのであり、ブリテン島の人々をローマ風の文明生活に導き入れようとする「文明化の使命感」までは、こうした他者認識からは一歩踏み出すだけで充分であった。

第三章では、属州ブリタンニアで起こった、ボウディッカの反乱に焦点を当て、征服と支配の実態を描く。この反乱に関する史料としては、タキトゥス『年代記』の記述とディオ・カッシウスの記述とがあるが、両者の間には記述の食い違いが見られる。この点について、両者の依拠した史料の違いに原因を求めるG・ウエブスターの解釈は、多くの推測に基づいているとして退けられる。この反乱を、スティーブン・ダイソンは「ローマ化」の進展に反発する自己回復闘争と位置づけたが、南川氏はトギドゥブヌス王のフィッシュボーンの例とイケニ族のコイン鋳造の例から、「ローマ化」ではイケニ族の反乱への関与を説明できないと結論付ける。

タキトゥスがローマ人の征服活動を、「野蛮な」人々を「文明化」するものと考えていたのは明らかであるが、彼は同時に、「野蛮な」人々も彼らなりの人生観や世界観、守るべき価値を持っていることをも認識していた。ところが、近代になると、タキトゥスの主張は単なる批判精神と受け取られ、「ローマ化」は文明化と解釈され、原住民はローマ的生活様式、文化を希求していたと見なされた。近年、「ローマ化」概念への批判が起こり、皆が「ローマ風であること」に至上の価値を感じていた訳ではないことにようやく気付いた。「ローマ化」概念を一度希釈して、ローマの統治を再検討し、改めて世界史におけるその意義を問う必要性を説き、それは伝統的なローマ帝国像を形成した一九世紀以降のヨーロッパの歩みを問うことにも繋がると述べ、本章を結ぶ。

（疋田隆康）

第四章は「ローマ化」の虚実を問う。ローマがブリテン島を「ローマ化」する積極的意志を有し、それを実践させたのかどうか、ローマ支配によるブリテン島の変化の内実はどのようなものだったか、に焦点をあてる。南川氏が立つのは歴史研究者としての視点であり、「ラディカルな考古学者たち」が考古史料の意義を強調し文字史料を軽視することに警鐘を鳴らす。一方、これまでの歴史研究者に対しても、近年の「ローマ化」議論について本格的意見を述べていないと指摘し、無批判ではない。

本章は、まず、ブリテン島の「都市化」の実態を都市プランから検討し、ローマ人による一定の理念に基いての都市建設・改造が行われていたことは確かとする。だが、南川氏は住民の意識こそを問題とする。他属州と比べて都市部での碑文出土数や公共建築物の割合が少なかった点に着目し、都市は単なる属州統治の根拠地であって、その住民は「ローマの属州の都市住民」としてのアイデンティティを感じるに至ってはおらず、もとの部族としての独自性を維持していたのだ、「ローマ帝国」という認識さえあ

ったかどうか疑わしい、と論じる。同様に、信仰面からも住民の「ローマ帝国」への帰属意識を探り、住民や兵士の信仰の世界はローマの神々だけでなく地元や他の地域の神々で充ち満ちており、一括りにはできない多様性が存在したこと、ローマ側の強い宗教政策を感じることはできないことを指摘する。さらに、別格に大きかった都市ロンディニウムや都市定住地以外の田園地帯にも言及し、これらからもブリテン島を積極的に変えてゆくようなローマの意志を読みとることは難しいとする。

このように、ローマ人の活動からは「文明化の使命」を読みとりがたいことを南川氏は丹念に論証し、ローマ人の建設活動が有したより大きな歴史的意義は、近現代イギリス人が自らの歴史を理解する際に、「文明化」の理念的根拠を与えてしまったことにこそあるのだとして本章を結ぶ。

属州南部を中心に扱った第四章とは視点を変え、第五章ではブリテン島の北方辺境地域に焦点をあてる。辺境駐屯の兵士たちの視点から、この地におけるローマ帝国の活動はいかなるものであったのかを考察する。本章前半では、ハドリアヌス長城とその周辺地域におけるローマ帝国の展開、ウィンドランダ遺跡の保存と研究の歴史、その過程で発見された木板文書とその内容構成が語られていく。後半では、より具体的に文書の中身を紹介しつつ、兵士の日常生活、隊長一家の生活や交際、地元ブリトン人への眼差しなどを実際に読み解いていく。

その結果、辺地のローマ軍兵士が地元住民から一歩離れた自己認識を有していたことは認められるものの、ローマ兵士とブリトン人との交流を示唆する事例も数多く、ローマ人、非ローマ人という単純な二項対立には収まりきらない状況が辺境地帯の日常には展開していた、という結論が導き出される。辺境のローマ帝国は、現実的には、排他的な支配をおこなう領域国家とは言い難い、ハイブリッドな存在であった。ブリテン島では、多様で可変的なアイデンティティを持つ人間集団が協同して活動しており、「ローマ」はそうした要素の一つにすぎなかった。

終章では、南川氏はローマン・ブリテン、ひいてはローマ帝国全体をハイブリッドな構造物としてより深く理解することの必要性を強調する。その上で、二項対立的理解が形成されてきた背景に対してもより意識的であらねばならないと指摘する。すなわち、ブリテン島とローマ帝国、さらには、イギリスと歴史的文明との距離感が、イギリス独自のローマ帝国像、「文明としてのローマ帝国像」を生み出していったのである。

（桑山由文）

三

ローマ帝国の辺境地域に関する研究は日本においては驚くほど少なく、研究者の関心をあまり惹いてこなかった。とくに属州ブリタンニアそのものに焦点をあてた研究は皆無といってよい。本書はこのような著しくバランスを欠いた研究状況に再考を迫る。ウィンドランダ木板文書についてはこれまでも若干紹介されることはあったが、本書の特徴はその内容分析にとどまらず、遺跡自体をローマ北方辺境の史的変遷の内に位置づけて論じているところにある。加えて、キャムデン以来のウィンドランダ保存の流れなどにも大きく頁を割いており、遺跡全体の総合的研究の観を呈

している。ブリテン島各地のローマ遺跡を実地調査した経験に裏打ちされているこの視角、いわば、「地に足が着いた」視点は本書全体の底流をなしているのだが、とりわけ、第四章、第五章でこそ最大限に発揮されている。

さらに、本書はイギリス、とりわけオックスフォード大学におけるローマ史研究の展開を知る上でも格好の書である。実際、これまで我々日本の西洋古代史研究者は、欧米学界を単にローマ史研究の「本場」であると捉えるのみで、各国の近現代史と結び付けて考えることに重きを置かず、彼らの「偏向」の可能性について概ね無意識的であった。この点への注意を喚起させる本書の価値はたいへん高い。今後のわが国ローマ史研究の方向のひとつを指し示しているといえよう。

しかしながら、こうした「偏向」に対して意識的であるためか、本書はローマ帝国の支配のインパクトを低く見積もりがちである。たとえば、ローマは「かなり長い期間にわたって、新たに登場した一部族勢力くらいにしか認識されていなかったのではなかろうか」（二一六頁）としてブリテン島住民の多様性を強調する。ローマ支配が都市や道路網など点と線に限定されており、ローマか非ローマかでは括ることのできない多様なアイデンティティの人々が存在した、という本書の主旨自体は確かに納得できる。だが、たとえばS・マッタンらの近年のローマ帝国主義に関する研究は、ローマが大規模構造物でもって帝国に対する畏怖の念を住民に植えつけ、支配の基盤としようとした点を強調している。ローマ帝国がブリテン島において最も可視的な存在だったことは否定できないのではないか。多様のうちの一つにすぎないとまで言うことには飛躍を感じた。また、これに関しては、兵士についての分析がローマ補助軍に集中している点も気になった。ローマ市民であることが前提の正規軍団についての考察が、第四章の信仰面に関連して述べられることを除けば、かなり少ない。そのため、読者はブリテン島駐屯のローマ兵士の大半がゲルマニアやガリア出身で、曖昧なアイデンティティの持ち主であったとの印象を受けてしまう。もっとも、これは、ウィンドランダについての分析が本書の中核の一つである以上、仕方のないことかもしれない。

いずれにせよ、本書の議論を受け、ローマ帝国の属州支配に関する我々の認識は大きく変化せざるをえない。ただ、それゆえにこそ、本書が提示するローマン・ブリテン像が、ローマ帝国全体の理解にどこまで有効なのかという問題が新たに出現しよう。すなわち、どこまでがローマン・ブリテン特殊の状況であり、どこまでがローマ帝国全体に共通した事象であったのか。ブリタンニアはローマ支配下に入った時期も遅く、最終的には放棄された属州である。たとえば、早くからローマ支配下にあったナルボネンシスや、ギリシア文化圏であり東ローマ帝国として長期にわたって存続もした帝国東部とは、成立の経緯や帝国中枢の認識など多様な点で異なっていよう。南川氏自身、「あとがき」にて今後はゲルマニアなどへも研究対象を拡げていきたいと抱負を述べているが、そうした北部辺境だけでなく、多様な地域との比較も必要なのではなかろうか。

（桑山由文）

ケルト研究の立場からは、南川氏は本書全体の議論を通じて、

ラディカルな考古学者に対して反論を試みているように見受けられる。直接的な言及はないものの、本書は彼らの見解を多分に意識して書かれている。南川氏のそのような意識が最も顕著に現れているのは、第二章である。そこでは、ラディカルな考古学者の文献史料を排除する研究態度に対して「他者認識の歴史学」が提唱されるが、考古学者は学問としての「(先史)考古学」成立時のパラダイムに対する反省から、「エスニシティ」に敏感になっているように評者は考えている。残念ながら、他者認識あるいは自己認識を文字史料から考察するだけでは、考古学者と歴史学者との溝は埋まらず、争点の噛み合わない水掛け論に終始するだけであろう。このようなことを問題にするのは、本書の趣旨から離れた的外れなことかもしれないが、文字史料が少なく、考古学に多くを負わざるを得ない分野の研究者なら常に感じているジレンマであろう。

本書では、「ケルト」や「ローマ化」を巡る議論、ボウディッカの反乱の意義など、幾つかの議論に関しては、問題提起はなされているものの、それらに対する南川氏の見解が明示されていない。何れも難解で、論争の的となっている。その上、現時点では今後の議論の見通しすら判然とせず、明言することが極めて困難な問題でもある。そのため、このようなことは無い物ねだりに属することかもしれないが、やはり隔靴掻痒の感を免れない。南川氏の今後の研究の進展を期待したい。

以上のような問題点はあるものの、本書は様々な点で、示唆に富んでいる。ケルト研究を例に取ると、従来、「ケルト」に関する変化を安易にローマのインパクトによって説明する傾向があったが、本書によって示されたようにローマの支配が点と線であったならば、そのような説明は成り立たない。従って、本書は「ケルト」の変化に対するローマの影響を再考する契機となるのではないかと評者は期待している。

(疋田隆康)

本書は古代史家の著作であるが、その内容は「帝国意識」、「ブリティッシュネス」、「ケルト」等、(イギリス)近現代史研究者にとっても興味深い数多くの問題を提起している。

以下、気にかかった点をいくつか指摘したい。最初の問題は第一章について、ローマン・ブリテン研究がイギリスの植民地支配に資した、というヒングリ等の批判を行き過ぎとしていることである。とくに、「……実際にインド統治にゆく官僚たちにとって、精神面はともかく実務面でオックスフォード、ケンブリッジで学んだ古代ローマの行政システムや軍事制度の話が現地で有効であったとはとうてい思われない。……比喩や修辞を別にすれば、そのような安直なアナロジーを持ち出す必要はなかったと私には思われる。当時も、そして今も、古典学・古代史は人間の本質や真価に関わる学問であって、実務のためのものではないからである。……」(五五―五六頁、傍点評者)の箇所は、古典学・古代史を免責しているようでもあり、多少疑問を感じる。他の本国人同様、オクスブリッジ出身者にとっても、植民地という著しく劣悪な環境で生活することには、ある種の動機づけが必要であった。その動機づけにおいてギリシア・ローマの古典は多大な役割を果たしたし、そうしたテーマの探究は、経済史に偏するイギリス帝国史研究にとっても不可欠な課題といえよう。

しかし他方で、かかる帝国史の文脈において、（ローマ帝国ではなく）ローマン・ブリテンがいかなる役割を果たしたかを確定することは難しい。ローマン・ブリテンが、イギリスにとってナショナル・アイデンティティの問題であり、またローマ帝国が、イギリス帝国にとって「模範」であったことは容易に理解できる。だが、イギリス帝国にとってのローマン・ブリテンの意味は、必ずしも明確とはいえない。序章に、「……イギリス人研究者はまずローマン・ブリテンを見て、そこからローマ帝国……の全体を考えている……」（一六頁）とあるが、この「イギリス人研究者」をイギリス帝国に置き換えても同じことがいえるかどうかは議論の余地がある。同様に、第一章のキプリングの問題も、「（イギリス）帝国の尖兵」というより、ブリテン史的文脈に位置づけたほうがわかりやすい。世紀転換期、景観保護を通して「ブリティッシュネス」の創出に貢献したナショナル・トラストに、キプリングもまた関わっているためである。

とはいえ、本書の内容が数多くの興味深い問題を提起していることに変わりはない。近年のイギリス近現代史研究は細分化が極まり、また「政治」に対する関心は、「帝国意識」の問題に収斂する傾向が強い。こうした状況に在って、本書の包括性、あるいは古代史に遡ってナショナル・アイデンティティの問題を探究する姿勢は、とくに評価すべきである。イギリス史を学ぶ者全てにとっての必読文献といえよう。

（堀内隆行）

（viii＋二二四＋一九頁　二〇〇三年五月　岩波書店　二六〇〇円＋税）

（桑山由文　兵庫教育大学講師　　）
（堀内隆行　京都大学大学院文学研究科博士後期課程　　）
（疋田隆康　京都大学大学院文学研究科博士後期課程　　）